

る。

比島で壊滅した

第三三航空地部隊

愛知県 山崎 重藏

私は、大正六年十二月十四日、名古屋市の名古屋城下の雑貨商の家で生まれ、名古屋に育った。私は長男で、弟二人妹一人の家庭であった。昭和十三年、徴集兵として検査を受けたが丙種だった。そして昭和十六年に結婚し、時代も戦時となり、昭和十七年七月再検査の結果第一乙種合格となる。同年八月召集、三島の野戦重砲兵第二連隊に入隊。同十八年一月甲種幹部候補生に合格、四月より航空隊の教育を受けた。

三重県の明野飛行学校の分校が三重県鈴鹿にできた。中部第一二三部隊である。私は大学では文科であったが、教育は飛行機の整備の教育を受けた。戦闘機につける機関銃、爆弾を装置する教育が半年続けられ

た。四月入校、十月卒業であるから約七カ月の教育で曹長の階級に進み見習士官となる。同期生は千数百人おり、各科に別れた。

昭和十八年十月、水戸の航空隊に転属、十一月三日、当時の明治節の式が終わって、南方の第四航空軍（フィリピン）に転属となり、広島兵站宿舍から宇品へ呉へ行く。その時、レイテ戦へ行く戦艦「伊勢」、巡洋艦二隻、駆逐艦十隻の艦隊に便乗させてもらった。その時は航空将校ばかり六〇数人であった。海南島で、マラッカから来た駆潜艇二隻に乗り換えた。何しろ、戦艦以下十数隻の艦隊であるから、途中は雷撃も受けることはなく、無傷で海南島着であった。

今度は駆潜艇でマニラ着、艦隊はレイテ戦に参加したのである。我々の司令官の富永中将に転属の申告をした。十二月に、司令官から命令が出て、第一二七飛行場大隊のあるリバ（レイテの向こう側）へ行き、レイテへ出撃する特別攻撃隊の乗機の整備をして送り出していた。再び還ることのない若い人々を見送るのは悲壮なものがあった。

この第一二七飛行場大隊は第三十三航空地域隊に入り、さらに第一三六飛行場大隊。飛行場大隊は本体五〇〇人ぐらい、私の中隊長は加藤中尉で警備中隊である。加藤中尉は歩兵科より転科された方だが、私は初めから整備教育を受けた。私は文科出身で工科に転じたようなものであるから、僅か六カ月の間飛行機の機械、整備のみに専念していた。

昭和十九年一月七日、米軍が上陸するということで、我が部隊も引き揚げマニラへ集結した。一週間北上、方面軍はバレテを越え州都バヨンボンへ、その後キャンガンに入った。方面軍司令官は山下奉文大将である。我々は航空機の機関銃（砲）をはずし、トラック十台に積み、臨時歩兵第十六大隊に編成され、モロンの第一〇五師団の指揮下に入り、バガバック警備を命ぜられた。四個中隊編成、千数百人の兵員であった。

第一二七飛行大隊は四個中隊に分かれ、私は第二中隊、隊長は先に申した歩兵科転科の加藤中尉である。

装備はトラック十台で持って来た兵器であるが、機関銃と小銃のみであった。

食料は、オリオン峠を越した所にあるカガヤン平野で収穫される米であり、その米を集積して第一線に送ったのである。昭和二十年六月までバガバックにおいて警備と食料補給の任務をした。飛行隊から歩兵に変わったわけである。師団司令部はモロンにあったが、その後キャンガンへ移った。方面軍司令部は山の奥へ行ったため、ここが最後の防衛線となったのである。

六月に入ってから、第一防衛線は破れ、第二防衛線をキャンガン、バレテ峠として第十師団等が頑張っていた。戦車第二師団（撃兵団）も機関銃を戦車から外し防衛線に入った。一月から六月までよく持ち堪えたものである。食料は航空隊、後方支援部隊が補給隊の役目をしていった。

昼間は米軍の航空機（偵察機を含め）が来るので移動が出来ない。夜になって米（粳）を臼で搗く（カガヤンから粳で持って来る）、この精白作業を毎晩やっ

て一〇〇袋ほど作り、第一線部隊に夜配給した。

昼は米軍機の爆撃を受けるので部落にある何千本もの椰子林（空からはジャングルのように見える）に身を隠していた。時々、P 38が嚇しの射撃をしてきたが、我々の部隊は分散しているので被害は少なかった。

私の部隊は六月初めころはオリオン峠にあった第一中隊、後方のバガバックにいた第二中隊であって、第一中隊が戦前の土民軍が出没して包囲されたと知ったので、第二中隊（約四〇〇人）が応援に行き戦闘した。我が隊は緒戦でこれら土民軍を撃退することができた。

その後、私はカガヤン平野の第一〇五師団輸送隊転属を命ぜられ、師団から来た一個小隊五〇人ほどを連れて行った。地図はお守り袋に入れて持って来ていたので、それを頼りに六月八日カガヤンへ食料を取りに行くとも軍が既に侵入しており、キャンガンへの食料輸送はできなくなった。今までは、一個小隊でフィリピン馬三頭を集め輸送に使っており、私は野戦重砲隊

出身のため馬には馴れていたもので、馬に乗って輸送の補助にも役立っていたのであったのだが。

私の所属していた第二中隊の大部分は、その後斬り込み隊や戦車爆雷攻撃に使われほとんど戦死している。我々特別任務をもった将校三人のみが生き延びた。私同様他部隊へ入った者は生き残り、本隊（臨時歩兵第十六大隊）の将校は第二中隊長以外は戦死している。

コルドンで米軍に追い付かれ、六月十二日、マガット川を越える前、舟が無いので葦原に寝いたら米軍に包囲された。米軍人はそばまで来ないが、住民がバタイ（死んでいる）と米軍に教えているので、私は生きた心地がしなかった。この危険を越え米軍が去ったので舟を探し一隻を見付けることができ、装具を積んで川を渡ることができた。米は持っていたが、火を使わず米が炊けぬので砂糖を舂めて生きていた。

川の向こうに日本軍がいるという。満州から来た通信第二連隊に遭遇し、同連隊の人々と一緒に行動し

た。山下司令官を追って来た連隊で、一五〇〇人ぐらいで、輸送船は沈まずにフィリピンに着いたから装備もあり、ゲリラや土民軍も手が出せない無傷の軍隊であった。これで私も助かったのである。この日はたしか六月十三日であったと記憶している。

その後、通信連隊と行動を共にした。私は結局第一〇五師団輸送隊と別行動をとることとなった。そしてその間の行動を紙に書いていた。その記録は、お守りの中に細かく折り畳んで密かに持参し帰国することが出来たし、米軍に発見されず没収をまぬがれた。

瑞穂村（日本で付けた仮名）にいた八月十五日の昼、内地の放送を聞いた。通信隊であるので、七時ごろ発電機を起動し玉音放送を聞くことができ、終戦を非公式に知ったのである。瑞穂村に駐留の間、第十四方面軍司令部と連絡をとり、命令を受けた。方面軍司令部の命令は「九月中に山を降りぬと、米軍が掃討作戦をするので山を降りろ」というものであった。我々は、白旗をかかげて降伏した。十月四日、武装解除、

バギオ收容所に收容されることとなった。

思い返せば、私は通信隊と合同で夜間行動のみで歩き、河を渡っての行動であった。しかし、私は生きることができたが、この間、マラリア、栄養失調で多くの人が死んでいった。

最後はポントックで、私と小林少尉の将校二人と下士官一人、兵隊八人ぐらいしか生き残らなかった。四十数人がこれだけになってしまった。三十人はほとんど病气や怪我で歩けなくなり、部隊に追及できなくなっていた。道といっても「けもの道」のようなもので、ジャングルの中を潜り抜け、樹木の間をやつとの思いで歩くのであるから落伍者も多かった。

七月三十日ごろ、天目山を降りた所にフィリピンにいた邦人二〇〇人ぐらいと会った。女性、子供、看護婦などほとんどが非戦闘員で在留邦人である。あの時の女性や子供たちは、終戦直前であったから生きて帰れたのではなからうか、生きて帰れたことを今でも心に念じている。

方面軍司令部がいた時の一月〜六月ごろまで、在留邦人は軍と行動を共にし、千数百人が避難し自活していたという。しかも、その人たちは、米軍や現地土民に追いまくられての逃避であった。

話は前に戻るが、四月ごろ、土民軍が米軍からバラシュートで武器弾薬の補給を受けているのを見ている。山の中には米軍の秘密飛行場があり、それを占拠していたことがある。しかし、後にその仕返しを受け、オリオン峠の戦鬪と二回の戦鬪をした。

我々は、バギオの収容所から北サンフェルナンドへ行き、汽車でマニラまで行き、モンテルパの収容所に入った。我が隊は、四〇人中生き残り十数人となったが、収容所では将校と兵隊とは別々にされた。一テントには五〇人ぐらい収容されたが、将校は条約により労役はなく、拘束もあまりなかった。

戦犯者の刑務所はそのそばにあり、私は昭和二十年十月から十二月二十五日まで収容された。この二カ月間で体力はだんだんと回復したが、体重は二〇キロ台で、骨と皮の状態であった。私が、三島の野戦重砲隊

に入隊した時は七〇キロぐらいあったのだから、半分にも満たぬ体重である。

昭和二十一年一月十日、神奈川県浦賀上陸であるから、早い復員であった。東京経由で帰ったのだが、名古屋の家は全焼し跡形もないので、現在の千種区に住んだ。兄弟三人全員兵隊、弟は現役で昭和十五年入隊、昭和十九年、北支の第二十六師団にいて内地送還をされたのだが、昭和二十年八月、大阪の堺の陸院から和歌山の日本赤十字病院に転院した。日赤にあった弟の資料は戦災で焼け、本人は和歌の浦の尼寺に収容されていたらしい。終戦になり白衣のまま家に帰っていた（私の復員の時）。その後病氣は全快せず一年ぐらいで死んでいる。カルテも焼けて証明もとれず、戦病死とはならなかった。

生きて帰れなかった者、生きて帰って戦病のため死んだ者、九死に一生を得て帰れた者、それぞれが、今次の大戦で幸、不幸を分けており、その本人のみならず家族も幸、不幸を分けて戦後五十余年経ている。

【解説】

第一二七飛行場大隊（威第一八四八部隊）概要

昭和十九年

五月三十日 九州大刀洗において編成完了

九月十七日 門司にて乗船決定 大隊長以下四〇六人

出発

十月二十六日 パシ―海峽にて、敵潜ドラムの雷撃を

受け海没、約半数の漂流人員掃海艇に救助され、ラ

ボック上陸、秦山丸に移乗

二十八日 北サンフェルナンド寄港

三十一日 再び敵潜の攻撃を受け二隻沈没

十一月一日 マニラ上陸、第四航空軍より二十日昭

南第三航空軍へ指揮移転を命ぜらる

十二日 昭南向船団乗船、輸送船三隻、護衛艇三

隻

十三日 埠頭を離れた直後空襲警報、四波に亘る

大空襲で港内すべての船沈没し大隊本部員三十九人

中七人のみ無事、第一二七飛行場大隊は編成以来の

四割強、一六〇数人となった

十八日 第四飛行師団より補充将校発令大隊長下

見軍三大尉 警備中隊長加藤香中尉他

二十三日 リバ東飛行場に展開を命ぜられ第三

三航空地区司令官の指揮下に入る

十二月 八日 見士・下士官以下四〇人、マニラ兵

站病院下番を入れ二四〇人弱の陣容となる

昭和二十年

一月 四日 北サンフェルナンド展開命令を受け、夜

行軍、一部自動車ピストン輸送にて前進

二十四日 北部ルソン、バガバック着、命により

後方補給、糧秣収集、バガバック警備につく

二十七日 ダグラスA20、ノースアメリカン十三

機の初襲を受け戦傷一人

三月 六日 第十四軍司令官の命により軍隊区分、第

一二七飛行大隊解消。下見少佐以下二十人、独立混

成第二十六連隊第三大隊に転属、警備中隊中心に照

空隊、電波小隊等により臨時歩兵第十六大隊第三中

隊を編成

十五日 部隊主力オリオン岬に移駐、以後部隊、

各中隊それぞれ北部ルソンの山野に死闘。

九月十四日終戦後約一カ月を経て、キャンガンにて山をおりたる第三中隊十数人、第一二七飛行場大隊四〇六人、マニラ及びバガバックにて補充、配属されたる将兵約一〇〇、計五〇〇余人中、内地に生還したるもの全てで三十七人のみであった。

特攻隊戦記

愛知県 柴田 勲 人

大東亜戦争を語るとき、特攻隊を語らずにはいられない。当時の特攻隊員はどのような考え方、行動をしてお国のために死んでいったのか。私なりに体験したこと、感じたことを後世の皆さん方にお伝えしたい。

まず、特攻隊といえは予科練をはずすことはできない。なぜならば、この戦争で特攻隊員として戦死した人は四千三百七十九人、そのうち海軍が二千五百三十五人、その中で三分の二以上の方が予科練出身者、す

なわち私の先輩達である。私が町長さんはじめ町の名士、並びに近所の方々や小学生の生徒さんたちに、日の丸の小旗を振り歓呼の声で送られて鹿児島海軍航空隊に入隊したのは、昭和十九年六月一日、海軍二等飛行兵になったのは十六歳と五カ月であった。

入隊と同時に非常に厳しい訓練が始まった。普通学としては国語、数学、英語、物理、地理などで、軍事学としては航法、運用、通信、通信には無線、手旗、旗流、手先、体育には海軍体操にフラフープ、それから夏は水泳と、徹底的にしほられ一日一日がくたくたである。

海軍ではすべての行動が全体責任であり、誰か一人の訓練生がヘマをすると、夜十時過ぎの巡検後に、廊下へ全員整列が掛かり、ビンタは常時、ときどき精神注入棒（野球のバット）で尻を力いっぱいぶん殴られ紫色に尻が腫れるのである。風呂に入った時など誰が何発殴られたかすぐ分かるし、お互いに痛かった話などしたものだ。寝る時など上を向いて寝られず、横を向いて寝た夜も幾晩かあった。